

能「高砂」と「西郷隆盛」からお国柄を考える



中西 喜彦

一、はじめに

今年二月に八十一歳となり、どうやら平均余命一年を元気に過ぎすことが出来た。何か凄く儲けたような気分になっている。

そこで、今年稽古する仕舞の曲目を、「高砂」同様お目出度い協能の中から「難波」とし、三月に皓月会春の会（福岡住吉神社能楽殿）で披露した。九月の宝生流教授嘱託会九州支部第六十回記念大会（大濠公園能楽堂）でも披露したいと思っている。

「難波」では百済の国から来た王仁が、今

度、仁徳天皇と言う立派な方が即位されたと唐楽の曲名を挙げながら祝って舞うものである。春鶯囀、秋風楽、萬歳楽、青海波、千秋楽、採桑老、抜頭の曲、など沢山の唐楽の曲名が出てきてそれが曲名と分かるまでちよつと戸惑った。

能「高砂」は六十八歳の時かごしま県民交流センター能舞台で皓月会大会が開催され、能「高砂」を披いた。そこで、再度その内容を検討してみた。

一方、今年は「西郷どん」がNHKの大河ドラマで放映されている。筆者は鹿児島市の山麓、東京の上野公園で大きな銅像にお目にかかつて六十三年になる。鹿児島で敬愛されているのは感じるが、どうも実像は良くわからない。落合莞爾氏は「日本教の聖者西郷隆盛」と紹介しておられるが、最近自裁された西部邁氏は「テロリスト西郷隆盛」と言つて

おられるのを聞いた。

前述の大河ドラマを時代考証した磯田道史氏は近著「素顔の西郷隆盛」で、「今から百五十年前西郷という男の強烈な個性をもつてしなければ、新しい日本は生まれませんでした。西郷が現在の日本国家のもとを作ったのであり、新国家を作るために、徹底した破壊を断行しました。制度設計として、江戸幕府を残してはいけないという激しい考えのもとに、維新をすすめ、今の日本の原型が形づくられました」とのべている。

ところで、今年、明治維新百五十年と言うが、世界情勢は幕末と類似したところがあるように思える。現在世界の超大国として君臨している米国は二度目の南北戦争の状態ともいえる。FRBに代表される国際金融資本連合に対して地場産業の戦いだとも言える。

これを馬淵睦夫氏はグローバリズムとナショ

ナリズムの戦いと表現して居られる。

また、トランプ大統領の我国初回訪問は我国と米国の関係に於ける実状を見た気がした。横田基地に専用機で入国し、海兵隊諸氏に訓示を垂れ、皇居への表敬訪問もなく、ゴルフ場に向かった。

幕末の国状に現在の政体を当てはめると我国は横田海兵隊政府(幕府)と永田町政府(京都所司代)で運営されているようにも見える。幕藩体制ならぬ横田海兵隊基地体制(欧米帝国主義の残影)からの変革の時期にあると思う。

そこで、我国の国體のあり方を、室町から現在まで約六百五十年に亘って上演され、特に江戸時代には式楽として維持されてきた能楽の最右翼「高砂」について調べてみた。

その一方、鹿児島に住む人間の一人として、この機会に、明治維新の立役者西郷隆盛の本



かごしま県民交流センター能舞台（平成16年6月6日）『高砂』。
シテ（老人）中西喜彦、ツレ（老女）中西和夫。橋掛りから
舞台に出て来たところ。

性に少しでも近づければと願う次第である。

また、この二つの話題をもとに我国の国體のあり方について考えてみたい。

二、能「高砂」でみる我国の姿

能「高砂」は、能にして神事に近いと言われる「翁」の次に目出度い曲とされている。

筆者は今頃になって改めて我が国の本質を描写した名曲と思うのである。

（二・一）物語の概要

時は延喜の年（醍醐天皇の代）、肥後国阿蘇宮の神職友成が京都見物を思い立ち春風長閑な中、途中播州高砂に立寄ります。そこで老人夫婦を見つめます。老人は熊手、老女は杉箒を手に松の木陰を掃いています。そこで友成は二人に高砂の松と住吉の松を相生の松と言う理由を尋ねます。

すると、二人は心が通じていれば離れていても遠くはないと答えます。また、高砂は「万

葉集」の時代、住吉は「古今和歌集」の時代、

松は和歌の道のたとえであり、平和の象徴であるという。千年の緑をたたえた松の素晴らしさを説く老夫婦は松の精であった。住吉で待つと言いい残して船出する。

続いて友成も土地のものの新造船に乗って住吉へ行くと、澄んだ月あかりのもと住吉明神が現れ、祝福の神舞を舞うという筋書きです。

(二・二) 舞台の見どころ聞きどころ

《次第》友成達が無事高砂に出る目的を述べます。

《道行》友成達が無事高砂に着いたことを述べます。

《一声》老人と老女が熊手と杉箒を肩にかけて橋掛りに出て向き合います。そして謡いだし

老人・老女 高砂の松の春風吹きくれて、

尾上の鐘も響くなり。

老女 波は霞の磯がくれ、

老人・老女 音こそ汐の、満干なれ。

老女は先に舞台の真ん中に出ます。続いて

老人も舞台の入口(常座)に出ます。

《サシ》

老人 誰をかも知る人にせん高砂の、松も昔のともならず、

老人・老女 過ぎ来し世々は白雪の、積も

り積もりて老いの鶴の、寝ぐらに残る有明の、春の霜夜の起居にも松風をのみ聞き馴れて、心を友とすがむしろの、思いをのぶるばかりなり。

《下歌、上歌、問答 略》

地 四海波静かにて、国も治る時津

《問答略》

地クセ

風、枝をならさぬ御代なれや。
あひに相生の、松こそめでたかりけれ。げにや仰ぎても、こともおろかやかかる世に、住める民として豊かなる、君の恵みぞ有難き、君の恵みぞ有難き。

然るに長能が言葉にも、有情非情の其声、皆歌にもるることなし。草木土砂、風声水音まで萬物のこもる心あり。春の林の東風に動き、秋の虫の北露に鳴くも、皆和歌の姿ならずや。(以下略)

中入

《待謡》友成

高砂や此浦船に帆をあげて、此浦船に帆を

あげて、月諸共に出で汐の、波の淡路の嶋陰や、遠く鳴尾の沖すぎて、はや住の江に着きにけり、早住の江に着きにけり。

《サシ》颯爽と住吉明神現れる。

住吉明神 我見ても久しくなりぬ住吉の、

岸の姫松幾世経ぬらん、睦ましと君は知らずや瑞垣の、久しき世々の神かぐら、夜の鼓の拍子を揃へて、すずしめ給え、宮づこたち

以下略

舞(神舞)を舞い祝福する。

(二一三) 高砂の解説

本曲のシテは松の精と住吉明神である。

夫婦で波の音、風の声の中で四季を過(こ)し、松の木陰を清掃している。稲作社会では常に稲の周囲の雑草との戦いである。さらに、日

本文化が支那大陸文化と分離した時期の万葉集と、さらに進めた古今和歌集を日本文化の二親と言う形で示している。その精神を有情、非情のその声、皆歌にもるることなし。草木土砂、風声水音まで、萬物のこもる心あり」と述べている。

哲学者梅原猛氏は「草木国土悉皆成仏」という前述の思想を、西洋文明の元になった自我の哲学より優れており、「人類哲学へ」と提案している。

前段では老人と老女が繰り広げて語る古今和歌集の作られた延喜の良き時代の有り様を地（合唱団）は「四海波静かにて——君の恵みぞ有難き。」と謡います。この文節は江戸時代には年の始めに將軍の前で能の家元が袴着用で謡ったと言われている。

後段の待謡で友成が謡う「高砂やこの浦船に帆をあげて——」の文節は結婚式の際謡われ

ている。高砂から住吉までの旅行の風景である。この二節がもつとも愛誦されており。

ところで、住吉神社の御祭神は第一本宮（底筒男命）、第二本宮（中筒男命）第三本宮（表筒男命）、第四本宮（神功皇后）の四柱である。

三柱は人格神でなく海底、海中、海面そのものが御神体である。一方、これは縄文時代からの海人族の海中に潜ったり、浮き上がる時の神秘感を示したものではなからうかと言われている。本曲では月夜に神が宿ると言われる松の前に出て、皆に祝福を与えている。

すなわち、前段が弥生時代、後段が縄文時代を暗示していると思われる。

三、西郷隆盛の評価

(三・一) 西郷隆盛の業績

- ① 大政奉還を徳川慶喜に認めさせたこと。
- ② 江戸城無血開城を勝海舟との間で成し遂げたこと。
- ③ 戊辰戦争を扇動して勝利させたこと。

と。④西南の役で担がれ敗走したことなどが挙げられる。

しかし、各界著名人の西郷評を聞いても、生誕地や各種資料館を覗いても彼の本質を理解出来ないでいた。

今年六月、町内会が企画した西南の役跡を訪ねる一泊二日の旅で、宮崎県延岡市北川町俵野地区にある西郷隆盛宿陣跡資料館を訪ねた時何か心に響くものがあった。それは宿陣地が可愛山陵（えのみささぎ）の麓にあり、其処が天孫瓊瓊杵命の御陵墓だと知っていて、あえてこの袋小路のような場所に宿陣したことが近年の資料で明らかになったからである。西郷は、政府軍が天皇家の先祖の墓に向けて砲撃できないであろうと考えたのである。事実政府軍は三日二晩にわたって攻撃しなかつたという。ここで西郷は薩軍幹部と最後の軍議をおこない「薩軍解散布告令」を出している。



薩摩軍最後の軍議（ここで薩軍解散布告令が決定された）。右から西郷隆盛、桐野利秋、村田新八。（西郷隆盛宿陣跡資料館）

軍議後、軍の重要書類と陸軍大将の軍服を母屋の空地で焼き、天皇家へ返却した気持なのであろうと言われている。また、最近辞世の句が発見され、句の内容から城山で作られたものでなく此処で作られたものであろうと言われている。

(三・二) 西郷南洲翁辞世の七言絶句

ほうすいほうさんみちすでにきわまる
肥水豊山路己窮

ぼんでんかえりゆかんはとむなし
墓田帰去霸凶空

はんせいのこうざいりようはんのあと
半生功罪両般跡

ちていでなんのかんばせあつてしようこうにたいせん
地底何顔対照公

実質上薩摩軍の最後の宿陣地が天孫瓊々杵尊陵墓麓であることを知り、西郷の本願は王政復古で明治維新に伴う西洋化とは違うので

はないかと思った。また辞世の句の最後に斉彬公にどんな顔をして地底でお会いしようかと述べている。

その斉彬公も藩主となり日向・大隅を視察した際、和氣清麻呂が、宇佐八幡宮神託事件に関連して大隅国へ遠島となったという場所に松を手植し、側近の八田知紀に命じて和氣公の遺跡調査を行わせた。この結果、この地が和氣公の配流地であったことが確定した。

皇統からすると弓削道鏡事件は大事件で、和氣公は皇統を守った人として、京都御所の前に護王神社として祀られている。霧島市妙見の和氣神社は斉彬公の勤王の思想を表している。

さらに、西郷家は真方衆と言う全国ネットワークの隠密集団で隆盛は若きプリンスであるという。また、西郷の素性は本冊子で執筆されている中山とし子氏の調査にも見られる

ように南朝に繋がる血筋もあるようだ。

(三・三) 西郷さんネットワーク

もう一つ追加したいことに江戸幕府体制下では、合戦の代わりに婚姻政策で各藩が勢力を確保しようとしたことである。薩摩藩で見ると重豪公（徳川家御台所、中津藩主養子、福岡藩主養子、八戸藩主養子）、斉宣公（松山藩主養子）、斉興公（近衛家簾中、岡山藩主養子、土佐藩主夫人）、斉彬公（徳川家御台所、近衛家簾中）となっている。江戸屋敷にこれらの藩主の子供さんが五十人以上居たとの報告がある。ネットワークの代表例が徳川家と島津家との関係である。篤姫と西郷の関係はとりわけよく知られている。

これらのことから、島津家の縁戚ネットワーク、全国展開の真方衆ネットワーク、調所笑左衛門を中心として構築した薩摩の財政力ネットワークが活用されたと推察される。

(三・四) 西郷さんの気質

公家や藩主から遊女にまで信頼される性質とはどうゆうものだろうか。①敬天愛人、②子孫に美田を残さず、③命もいらす名もいらぬ人は始末に困るものなり、④大きく叩けば大きく響き、小さく叩けば小さく響く人。などが西郷の評判として残されている。

落合莞爾氏は西南戦争を次のように評価している。「つまり大西郷は、夢破れて滅びたのではなく、①四民平等の（オオヤケの代）実現のために自分を慕う薩摩農士のリストラを敢行し、②自らも進んでその群れに投じて榮譽と生命を一挙に捨てたのです。このどちらか一つだけでも通常の偉人ですが、冷厳と情熱の二つを同時に行った人は、世界史でもごく稀ではないでしょうか。

情においては到底できないことを、己の生命と引き換えに敢行する、これが日本独特の

任侠の真髓なのです（日本教の聖者・西郷隆盛と天皇制社会主義。二百五十頁、成甲書房）。

即ち、戊辰戦争が徳川慶喜主導、西南戦争が西郷隆盛主導の武士層リストラの為の八百長戦争だとするとその凄さに少し実像に近づけた気がします。

四、我国の新時代に向けて

落合莞爾氏は我国の有り様について大変貴重な概念を提案して居られる。我国は縄文人、弥生人および古墳人の三大源流が共存しながら、豪族時代、律令時代、封建時代、武士の時代（名の代）を経て、明治維新によりオオヤケの代となり現在に至っていると言う。象徴天皇としての平成天皇を最後にオオヤケの代は終わり、今度は家族の代になると言う説である。

「家と族」とは、いわゆるファミリーのことではなく、人間社会を構成する不可分の最

小単位として「家」を中心とする時代である。

また「族」とは、遺伝子に刻まれた祖先の情報をも、個々の人生に取り入れることである。

家の問題は夫婦と子供を基本とした従来の単位が、それだけでは時代に対応出来ない状況になっている。しかし、色々な考えがあるので、ここでは省略する。

遺伝子の問題は特に重要な課題である。現在明治以降の都市部への人口集中や生活様式の変化で、散骨や樹木葬など、先祖と子孫の繋がりを切る動きがある。しかし、先祖あつての個人である。個人の能力や人生観は遺伝子半分、置かれた環境半分に左右されると考えられる。

五、おわりに

高砂で現れる住吉明神は伊弉諾尊（いざなぎのみこと）、伊弉那美尊（いざなみのみこと）が日向の国（宮崎）あおきが原で禊をした時

に生まれた底筒男命、中筒男命および表筒男命が合体した方であり、能では「西の海、あおきが原の波間より」「現れ出でたる神松の春なれや」と謡って神舞で友成達を祝福します。

一方、西郷隆盛が「平生の功罪両般跡」と、天孫降臨した瓊瓊杵命（にぎのみこと）（神武天皇の祖父）の墓前で軍服を焼き近衛の役と初代陸軍大将退任を報告したことを知り、感激致しました。

我が国は百五十年前王政復古の考えのもと廃仏毀釈の名で寺院仏閣を破壊し、内戦を経て西洋化をめざしました。現在皇歴二六七八年で万世一系と国の歴史の長さを世界に誇ります。

しかし、泰平の眠りを覚ました米国ペリー提督の黒船来航から今や百六十五年。米国は第七艦隊を横須賀に寄港させ、横田海兵隊基

地を指令本部に、岩国や沖縄を手足にして全世界に睨みを利かせています。その大統領トランプ氏は日本に護っているから駐留経費を払えとか、米国製自動車をもっと買えとか言っています。

この四十年間、世界情勢は大きく代わりアメリカの凋落、中国の台頭は著しい。日米間では貿易摩擦ですむが、米中では貿易戦争に突入したと言われる。米国の状況は、経済、人種、安全保障など日本よりかえって不安定に見える。従って、各国に是々非々で臨むためにも自力で国を護る体制確立が急務である。微妙な建前でなく、本音で話すためにも、自主憲法を制定して、自分で国を護る体制が必要です。其の上で諸外国に臨むべきだと思います。

完

（鹿児島大学名誉教授）